
夢の中で

さくら葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の中で

【Nコード】

N4360A

【作者名】

さくら栞

【あらすじ】

初の刹りん小説に手を加えたものです。ギャグ風味なので（え）兄上のイメージを壊したくない方にはお勧めできません；普段、原作でのキャラ（性格）重視に気をつけて書くだけあって、かなり挑戦でした；

(前書き)

警告しておきます。

これは殺生丸一行のギャグ小説なので、殺生丸のイメージがかなり壊れる恐れが…というか壊れます。

“ 爽やか青年 ” なありえない殺生丸に鳥肌の立つ方にはお勧めできません；

「おやすみなさい！殺生丸サマ！邪見サマ！」

毎日の習慣。一日中歩き回って疲れていても、りんは毎晩これだけは決して欠かさない。

「うるさいわいりん。少しは静かにできんのか！」

そしてその度に、帰ってくる邪見の怒鳴り声。毎晩繰り返されるこのやり取りを、殺生丸ただ無言で聞き流すように近くの木にもたれかかる。

「はあい。おやすみなさい」

やっと大人しくなったりんはふてくされた様にそう言うと、蹲る阿吽隣に小さく蹲った。

毎日の、毎晩のやり取り。何一つ変る事のないこのやり取りだが、りんは心の中で小さく溜め息をついた。

その原因は簡単。

——殺生丸サマ今日も『おやすみ』って言ってくれなかった・

それが、その無口さが殺生丸だと分かっている、一度だけでいい。たった一度だけでいから日が暮れるまで話したい・・・

お喋りな人間の少女は、小さな心でそう願わずにいらなかった。

だが毎晩思うその願いは、叶う事などなく・・・少女は静かに夢の世界へと入って行った・・・

「ふああ」

りんは眩しい朝日に目が覚めた。

「おっ起きたかりん」

眠たい眼を擦りながら起き上がると、先に起きていた邪見が声をかけてきた。

「あっおはよう邪見サマ！殺生丸サマは？」

周りを見回す前にとっさに聞いたりんだが、そう言うってから周りを見渡したが殺生丸の姿はやはりなかった。

「殺生丸様なら大分前に川の方に行かれたが・・・」

りんの言葉に口を開いた邪見だが、それはいつもとは違う、何処かぎこちない返事だった。

「ん？」

その様子に気が付いたりんはそう言うのと、行かれたがどうしたの？邪見サマ？、っと不思議そうな顔をした。

元々隠し事など出来ないこの邪見。

「いっいや！なんでもないわ！」

そう言うってから紛らわす様に、さっさと顔でも洗って来い！っと、言ったが何かを隠していることなど丸分かり。

「そお？じゃ、りん顔洗ってくるね！」

——やっぱり何か隠してる！

疑いながらもりんは、そう言うときまだ眠たい目を擦りながら、川の方へ走っていった。

川の場合は、昨夜行ったので直ぐに分かった。歩いてほんの直ぐの所だ。

「あ！殺生丸サマ！」

川の辺に着くや否や、殺生丸の後姿が目に入ったりんは寝起きとは思えない様に元気良く駆け寄った。

「殺生丸サマ！おはようございます！！」

いつもの様に、元気良く背中を見せたまま振り返らない殺生丸の背中に向かってあいさつした。

っが、これもいつもの事・・・と思いきや、殺生丸は振り向き

「おはよう、りん。」

人間嫌いで無口無愛想、加えて冷徹。上げれば切がないが、そんな代名詞の様な殺生丸の口から発せられた声は、“爽やか青年”としか言いようのない声だった。

「・・・!？」

これには流石のりんもとっさに反応できず黙り込んだ。

そして一秒後には、これはきつと何かの聞き間違いよ!っと、自分に言い聞かせているりんが居た。が、そんなりんの半分以上願いたいとも言える期待は、次の彼の言葉によって裏切られた。

「昨夜はいつもより寒かったが、よく眠れたか？」

そう。爽やか過ぎる声で。

その日の朝、いつもの様に準備を整えると、殺生丸一行は旅を始めた。

りんは殺生丸に乘せられて阿吽に乗り、徒歩の殺生丸を先頭に、邪見は阿吽の手綱を引く。いつもの全く変らない様だが、今の一行に“いつも通り”と言う言葉はありえない物だった。

「昨夜は少し肌寒かったが、日が昇るとだいぶ暖かいな。」

「うっうん」

「そっそうですなあ」

爽やかな殺生丸の言葉に、ビクつきながら即答するりと邪見は、お互いに顔を見合わせた。もちろん殺生丸と一番長い付き合いであろう阿吽も、その言葉にびくりと体を反応させた。

「どうした? 二人共?」

そんな普段はありえないような、心配そうな殺生丸の声に、りと邪見はびくりと体を硬くして、

「いっいえ!」

二人の声はきれいにハモった。しつこい様だが、当然阿吽もりんを乗せたまま、転びそうになるほど動揺した。

そして、このままりんを乗せて歩いていいのだろうか和本気で心配しているようだ。

「どうしたんだ?今日は二人とも変だぞ?何かあったのか?」

「そっそんなことないよ!ね?邪見サマ?」

——何かあったのってのはりん達の台詞のよーな気が・・・
心の中でツツコミながらも、慌てて邪見にフルと

「そっそうですぞ!殺生丸様!!」

——この方が殺生丸様と言う事は間違いないのに・・・一体昨夜何かあったんじゃない??

お仕置きを喰らわないだろうと安心しながらも、こちらもツツコンでいた。

「ならいいのだが・・・もうそろそろで着くぞ、りん」

「え?着くって?」

殺生丸が口を開くたびにビクついているりんだが、次の瞬間その気持ちはすっ飛んだ。

「わぁー!きれいなお花畑!!」

一行の前に現れたのは、一面の花畑だった。

「だろう?喜ぶと思って黙っていたんだ。さっ今日は昼までならここで遊んでいてもいいぞ」

「ホント!?やったー!ありがとう!殺生丸サマ!!」

やはりまだ幼い少女と言う事もあってか、殺生丸の異変など忘れ、微笑む彼に微笑み返した。まあこの少女の場合、ちよっぴり天然少女さの所為かも知れないのだが・・・

「りん殺生丸サマにもお花の首飾り作ってあげる!!!邪見サマも

手伝って！」

そう言って隣を見たりんだが、既に邪見の姿はなかった。

「あ……逃げたなあ……」

「出来たよ殺生丸サマ!! ほら! りんとおそろいの!!」

数十分後、木の根元にもたれ掛かる殺生丸の元に、りんが花飾りを首にかけやって来た。その高々と上げられた手には、少し大きめな首飾りが握られていた。

「どれどれ……上手く出来たじゃないか」

「へへへっ! ちゃんと殺生丸サマ用はりんのより長く作っただよ。はいっ」

照れくさそうに微笑みながら、自分とお揃いの花は飾りを殺生丸の首にかけてやった。

「ありがとうな。りん」

微笑むりに微笑み返すと殺生丸は、そっとりんの頭を撫でてやった。

「へへへっ! あれ……? 邪見サマまだ戻らないの?」

ふと思いつ出した様に周りを見回したが、居るのは殺生丸と阿吽だけで、邪見の姿は見当たらなかった。

「ああ。アイツが戻ってきたら休憩は終わりだ」

「はーい!」

元気良く言ってから、あ、っと思いつ出した様に上目使いで殺生丸を見た。

「ねっ、殺生丸サマ? 今日はさ、いっぱいお話しょ?」

昨夜考えていたことを思い出し、勇気を出して言ってみた。

「ああ。いっぱい話そう!」

殺生丸はニッコリと微笑んだ。

その日、旅をしながら殺生丸はりんに色々な話をした。殺生丸が幼かった頃の事、父上の事。犬夜叉との事に邪見と会った時の事。

そして・・・りに助けられた時の事・・・

寝床を決め、皆で薪を囲いながらも殺生丸とりんは話を続けた。

「自分で言うのもなんだが、父上完璧だった」

何処か遠くを見つめるように、空に浮かぶ月を見上げた。

「妖怪としての実力はもちろん、茶や唄の心得も持っていた。そして容姿も」

「ふーん。殺生丸サマは殺生丸サマの父上に似てるの？」

「皆口をそろえてそう言うが、まだまだ父上には敵わないものがある。だがな、そんな父上にも欠点があったんだ」

「欠点？」

完璧な人でもやっぱり弱点ってあるんだ、っと、驚いたようにりんも月を見上げた。

「ああ。幼い頃から見ていたからずっと疑問に思わなかったんだが・・・父上の眉毛は先が割れてるんだ」

りに視線を戻すと、ニヤリと笑った。

「え？ホント？先が割れてるってこーゆー？」

小さな指で必死に割れた眉毛を描く様にした。

「そんな感じだな」

笑いを納めると、さて、っと座りなおした。

「もう遅い。早く寝なさいりん」

「はーい。おやすみなない！」

「おやすみ」

いつもの様に阿吽の横に蹲るりんの頭を撫でると、そう言って微笑んだ。

「おやすみなさい！」

いつものささやかな願いが叶ったりんは、もう一度そう言うと、ニッコリと微笑んだ。自分の横に腰を降ろす殺生丸を眺めている内に、今日一日の疲れがどっと押し寄せてきたのか、りんはすぐに眠りについた。

「ふああ〜」

りんは眩しい朝日に目が覚めた。

「おっ起きたかりん」

眠たい眼を擦りながら起き上がると、先に起きていた邪見が声をかけてきた。

「あっおはよう邪見サマ！殺生丸サマは？」

周りを見回す前にとっさに聞いたりんだが、そう言うってから周りを見渡したが殺生丸の姿はやはりなかった。

「殺生丸様なら大分前に川の方に行かれたぞ」

「あれ？りんの作ったお花の首飾りは？」

寝る前に目の前に置いたはずの花の首飾りがない事に、りんは気がついた。

「はぁ？何寝ぼけた事言っとるんじゃ。早く顔でも洗って来い！！」

ゆっくりと起き上がると、りんは周りを見渡した。いつもの様に消えた薪の後があったが、何か、何か違和感を感じた。

「——あれ・・・？」

「顔洗ってくるね・・・邪見サマ」

戸惑いながらも、そう言うときまだ眠たい目を擦りながら、川の方へ走っていった。

昨日の朝の様に・・・

川へ行く途中、その違和感を考えた。一体何が・・・何が違

ったのだろうか・・・？

———くあ・・・

「あ！殺生丸サマ！」

川の辺に着くや否や、殺生丸の後姿が目に入ったりんは寝起きとは思えない様に元気良く駆け寄った。

「殺生丸サマ！おはようございます！！」

殺生丸が振り返りニッコリと笑い返すと思い、りんは元気良く背中に向かって微笑んだ。

昨日の様に、ゆっくりと振り返った殺生丸だが、返事はなかった。そして期待していた笑顔も・・・

「殺生丸サマ？」

「行くぞ」

「はっはい」

殺生丸はいつもの調子に戻っていた。

起きた時に感じた違和感・・・

———あそこ、昨日寝た場所じゃなくて一昨日寝た場所だ・・・
そう・・・昨日の出来事は・・・

たとえば夢だったとしても、りんは嬉しかった。夢でも十分すぎるほどだった。

もうどれだけ進んだのだろうか？もうじき休憩しようとした時、一行は森を抜けた。

「わあー！きれいなお花畑！！」

一行の前に現れたのは、一面の花畑だった。そう。夢に出てきたのと同じ花畑が・・・

「一休みするぞ」

いつもの様に、ボソリと呟く様に殺生丸が言った。

「えっ！？いいの？やった！！」

大喜びするりんに向かって殺生丸が、誰にも聞こえないような声で呟いた。

「夢の中だけではつまらないだろう・・・」

(後書き)

まずスミマセンでした；；

りんちゃんよりも、これを読んだ貴女の方が驚いた顔をしている事でしょう；こんな兄上が変だ！！と・・・

かなり壊してしまいました(汗汗

えっと、これは初めての犬兄の小説を修正したものです。

よく子供ってふとある時に「これって夢で見た場所、場面かな？」

と思うことってあるじゃないですか？<私がありました；(あ

要するに、前にもこんなことがあった気がする…ってやつですよ。

りんちゃんもきつとその夢が鮮明だったんですよ。兄上はきつと
そんなりんちゃんの寝言を聞いてたんですよ(爆笑

実はこれを書いたすぐ後にかなりシリアスなのを書いたんですよ(笑
読み比べてみるとすごいかも；ちなみに「三日月の夜に：(上・下)
」です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4360a/>

夢の中で

2010年10月8日16時00分発行